

神戸とニューオリンズのジャズ交流

～大災害からの復興における文化の役割～

神戸とニューオリンズのジャズ交流実行委員会 事務局 太田敏一 ※

はじめに・・・復興と文化

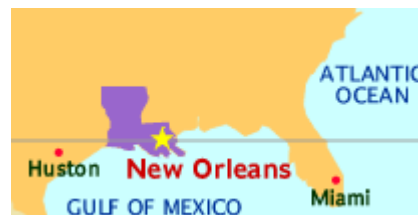
去る2008年10月18日から21日まで、神戸市内でニューオリンズ市の復興とジャズの交流をテーマにしたイベントが開催された。私は事務局の一人としてこのイベントにかかわった。本稿では、その経緯を報告するとともに、被災地の復興における文化の役割について考察を加えたい。

まず、いまさらながらの感があるが、なぜ「文化」が復興にとって関係があるのか、について冒頭に述べておきたい。これについては14年前に私が神戸市復興計画策定の事務局をしていた際にも、よく似た議論がなされたことを思い起こす。神戸市復興計画は、大震災から5ヶ月余りあとの6月末に完成した。したがって策定は、市内の混乱がまだ収まっていない中での作業である。おそらく5月下旬ころであったと思うが、復興計画の中の事業のうち、①緊急かつ重要なもの②復興を先導し波及効果大のもの③新しい神戸の復興の象徴となるものという基準で、17のシンボルプロジェクトを選定した。その中の一つに「9. 国際性、近代性などの特色を生かした神戸文化の振興」という項目があるが、それを入れるかどうかで大きな議論があった。多くの人の命がなくなり、まちがこれだけ大きなダメージを受けたなかで何が「文化」か、という議論である。しかし、まちの復興にとって、文化の復興は欠かせない、というよりは文化のないまちの復興はありえない、というような議論の結果、シンボルプロジェクトとして採用されるに至った。

このやり取りは、「文化」という言葉の響きに、何かしら「切迫感」を感じないという面があるのを否定できない。しかし、本当にそうなのか？復興にとって「文化」は付け足しなのか。本事業にかかわることにより、その古典的な問題について私なりに一つの回答を得ることができた。

1. ニューオリンズとのジャズ交流開催までの経緯

ニューオリンズ市は、メキシコ湾からミシシッピ川を約160キロさかのぼった、ミシシッピ川とポンチャートレイン湖の間にあるデルタ地帯に位置する人口45万人（2005年7月）のルイジアナ州最大の都市である。このニューオリンズ市は、2005年8月末にハリケーン・カトリーナに襲われ、今復興途上にある。ハリケーン・カトリーナの強さは、①最大風速：約80 m/s②最大瞬間風速：約90 m/s ③最低気圧：902 hPa（上陸時920hPa）であった。ちなみに1959年の伊勢湾台風では、最大風速：75 m/s（伊良湖45.4 m/s）最大瞬間風速は、伊良湖で55.3 m/s、最低気圧は894 hPaであった。アメリカと日本の風速の定義が異なるので、ほぼ同規模と考えてよい。このハリケーンによる死者は1836人、行方不明705人、被害総額は連邦政府の報告書によると960億ドル（約10兆円）にも上っている。被害はルイジアナ州を中心に広い地域にあったが、特にニューオリンズ市は、川や湖よりも地盤が低く別名「スープ皿」とよばれている地形であり、ポンプの不作動や破堤により、市内の8割が浸水するという大きな被害があった。カトリーナで避難した多くの市民がニューオリンズ市へ戻ってくる



※現、神戸市みなと総局

ペースは遅く、ニューオリンズ市のレポートでは、2007年6月で66%の回復率となっており、ローワー9th地区など、被害が大きかった地区ではまだまだ更地が残っている。



更地が広がるローワー9th地区（2008年3月）

神戸の復興にかかわっていた研究者は、カトリーナの後、いち早く、ニューオリンズの復興の支援に駆けつけ、早い段階から交流が始まった。また、それらの活動を支援するために、国際協力基金日米センター（CGP）では、神戸の復興の教訓と経験がニューオリンズで活用されることを目的に、研究者や神戸の復興にかかわった人々との連携交流を図ろうと、日米それぞれで交流事業を開催した。2006年10月には、ニューオリンズ市のオリバー・トーマス市議会議員（当時）ら8人を招いて神戸の視察を行った。このときの模様は、NHK教育テレビの特集番組「KOBE 巨大災害の時代を生きる」（2007年1月20日放送）で紹介されたが、トーマス議長は神戸の復興の状況を見て「神戸は献身的な努力、忍耐、参加によって復興が可能であることを示した」と述べ、帰国後の市議会でも神戸の経験が報告された。この番組でコメンテーターの姜尚中東京大学教授が「アメリカから学んだ民主主義が逆に神戸を通じて帰っていく」と述べていたのが印象的であった。

このような復興にかかわる方々や研究者の交流の場で、「復興の交流だけにとどまらず、ニューオリンズと神戸の共通の伝統的文化であるジャズの交流も重要であるし、復興にも寄与できるのではないか」という話が再々出てくるが、話には出てきても、どのように進めるか、となるとそれから先に進まない状況であった。「神戸市からだれか行って話しをしてみてもどうか？」という京都大学の林春男教授のお誘いにより、私は立木茂雄同志社大学教授、牧紀男京都大学准教授とともにニューオリンズ復興調査に同行した。そして、ニューオリンズとその周辺の復興状況を視察するとともに、3月2日にニューオリンズ市の復興に尽力する地元指導者や市議会議員が集まる場で、ジャズ交流について意見交流をおこなった。場所は、ニューオリンズのベトナム人コミュニティの拠点の「メアリークイーンベトナム教会」

である。その場に居合わせたのは、教会のグエン神父、フィルコー市議会議員、ウイラード・ルイス市議会議員らであった。その場での懇談で、大きな災害を受けた両市が、両市固有の文化である「ジャズ」で交流することは大いに意義があると意見が一致し、早速翌日の3月3日には、フィルコー議長室で、ウイラード・ルイス市議他何人かの市議会議員（注：ニューオリンズ市の市議会議員は全員で7名であり、紹介されなかったがそのうちの何人かが参加）と市の有力者のいる中で、再度会合がもたれ、その交流実現に努力しようということ合意した。



ベトナム教会での懇談（右から二人目が筆者）

帰国後、さっそく、実行委員会結成のための準備を開始し、4月23日（水）に第1回実行委員会を開催した。実行委員には、神戸市内のまちづくり協議会連合会の諸団体やまちづくり関係者、ジャズ関係者、研究者、学校、マスコミなど幅広い組織とメンバーが参加

した。そして第1回委員会で委員長に池田寔彦さん、事務局長に日下雄介さんを選んだ。池田さんは、六甲道の琵琶町で被災し、琵琶町復興住民協議会の会長として苦労されてきた方であり、また、自らアマチュアバンド「ビッグ・ディッパーズ」でチューバを演奏し、さらに神戸ジャズCITY委員会の広報委員長をするなど、神戸のジャズの普及に尽力されている方である。事務局長の日下さんは、日本学校ジャズ教育協会関西本部の事務局長をされており、学生のジャズバンドの指導育成では重要な役割をされている。毎年夏に文化ホールで開催されている「スチューデントジャズフェスティバル」など、若者育成の場になくってはならない方である。

ニューオリンズは今、復興の最中で財政的には厳しい条件であることから、実行委員会の議論として、交流のための資金は神戸サイドでなんとかする必要がある、という結論を得た。ちょうどその頃、これまでニューオリンズと神戸の交流を支援してくれていたCGPが民間主体の海外交流事業の助成金を応募している最中であつたので、それへの助成金申請を行った。その後4回の実行委員会を開催し、さらに、7月には再度、林教授、立木教授、牧准教授、日下さんらがニューオリンズを訪問し、本事業のカウンターパートとしてニューオリンズ市から紹介されたNOCCA（ニューオリンズ・センター・フォー・クリエーティブアーツ：中高生を対象にしたニューオリンズの音楽と芸術のルイジアナ州立専門学校）のサリー・ペリー校長らと協議を行った。そして9月には、CGPから助成金採択の朗報を得ることができ、10月18日から4日間にわたる交流イベントを行ったのである。

2. 交流事業の意義

交流の意義について、実行委員会では下記のような趣旨を確認した。

「復興途上にあるニューオリンズ市と神戸市は、ともに未曾有の自然災害に襲われ、ここからの復興を体験したまちである。ともに港町であり、異文化が交流する中で、多くの独自の文化資産を有するまち、そしてどちらも「ジャズ発祥のまち」という共通点をもっている。

先進国の近代都市であり、特筆すべき災害からの復興に立ち向かう二つの都市が、ジャズなどの両市固有の文化資産の交流を通して復興に関する経験・問題・教訓を交流させることの意義は大きいものがある。復興は、単にインフラや建物が元に戻るというだけでは成し遂げられるものではなく、人々が愛する文化や心の復興があつて初めてなし遂げられるものである。ニューオリンズ市と神戸市の被災から復興に至る経験を元にした、文化資産を生かした幅広い交流の意義は、今後の世界の都市の復興における貴重な先進事例となり、世界中の被災地をはげますこととなろう。

また、災害教訓を次の世代へと伝えるのは、若い人たちである。災害を知らない若い人たちや被災地外の人々がこの地域の文化資産の活用を確かめる取り組みに参加することは、その契機となつた災害と復興について学ぶ絶好の機会を提供し、将来の災害への取り組みとしても重要である。」

3. ニューオリンズからの参加者

今回の交流事業へのニューオリンズ市からの参加者は以下の通りである。

- ・ **リサ・ポンス・デ・レオンさん**（ニューオリンズ市国際局長）
- ・ **ヴィエン・テ・グエンさん** メアリークイーン・ベトナム教会神父

・サリー・ペリーさん（NOCCA校長）

NOCCA推薦の若手ミュージシャンとして、

・サリバン・フォートナーJr.さん（ピアノ 21歳 NOCCA卒業生 現在、マンハッタン音楽院マスターコース）

・マーティン・マサコウスキさん（ベース 18歳 NOCCA卒業生 現在ニューオリンズ大学1年生 父親は高名なジャズギタリスト）

なお、フィルコー議長、ウイラード・ルイス市議は、当初一緒に来神の予定であったが、直前にハリケーン・グスタフをはじめ二つの大きなハリケーンに襲われ、来訪が不可能になり、急遽ニューオリンズ市を代表してリサさんが参加した。

4. 交流事業

交流事業として、3つの事業を行った。まず、10月18日に開催されるネクスト・ジャズ・コンペティションにおいて出演者と共演をしてもらい、そのコンペでの優勝者にルイ・アームストロング・ジャズ賞を授与してもらうこと。そして、翌19日には、たかとり教会でトークショーとジャズや食文化のイベントに出演してもらうこと。最終日の21日には、六甲道地区で、地元の方々や研究者たちと、復興と文化について語り合う場を設け、地元の音楽専門学校である甲陽音楽学院の学生たちとの交流で締めくくった。

また、20日には、ニューオリンズからの方々には神戸の復興状況を視察してもらう場を設けた。以下、イベントごとに紹介する。

1) ネクスト・コンペティションでの演奏とルイ・アームストロング賞授与

10月18日(土) 舞子ビラ神戸 あじさいホール

今年で第2回目の新しいイベントで、今回は、神戸市西部の舞子ビラで開催され

た。このコンペティションは若手のジャズミュージシャンの登竜門と位置づけられている。この場で、ニューオリンズからの若手プレイヤーがゲスト出演した。日本人の若手プレイヤーと



の共演は素晴らしいもので、演奏後は満場の聴衆の拍手が鳴り止まなかった。最後に、優勝者にNOCCAのサリー・ペリーさんからニューオリンズ市の特別賞『ルイ・アームストロング・ジャズ・アワード』が授与された。

2) 鷹取地区で住民との復興経験交流およびジャズと食文化の交流

10月19日(日) カトリックたかとり教会 中庭

たかとり教会は、阪神・淡路大震災で大きな被害が出た長田区にある。震災の後、ベトナム人をはじめ多くの外国人のための救援基地となった。今も、日曜日になると、ベトナム人をはじめ多くの方々がミサに集まってくる。この日も、午前中にミサが行われた。グエン神父もベトナム語と一緒にミサを執り



左からサリー、リサ、池田



行った。そして正午から、イベントが開始された。「食」の交流として、ケージャン料理やベトナム料理、ペルー料理、韓国料理などの紹介と、当地の自慢料理である「焼きそば」や、災害時の食料支援の定番料理「炊き出し」など、地元の手作りの料理が披露された。ケージャン料理はグエン神父自らが料理の腕を振るわれた。

同時に、FMわいわいの生放送として、復興におけるコミュニティや文化の役割などについて語り合うトーク番組が放送された。その後、太鼓演奏や、神戸のミュージシャンとのジャズの共演が行われた。ジャズを共演した日本のプレーヤーは、サキソフオン；浅井良将さん、ドラム；定岡弘将さんである。この日の演奏のために浅井さんが復興の懸け橋にとの思いをこめて作曲した「Friendship～神戸からニューオリンズへ」が演奏された。

3) 六甲道地区で復興まちづくりに関するパネルディスカッション

10月21日（火）六甲道「風の家」

大震災で大きな被害を受けた東の地区の一つが「六甲道」であり、このコミュニティの拠点が「風の家」である。ここでニューオリンズ市からのメンバーとまちづくりのリーダー、学識経験者、行政関係者による『復興まちづくりに関するパネルディスカッション』を行い、復興の経験や教訓を語り合った。（議事録抜粋を後ろに掲載）



4) 甲陽音楽学院ホールでの交流

21日（火）午後5時30分から。

近くの甲陽音楽学院の音楽ホールで、フェアウェルパーティとして甲陽音楽学院の学生らと演奏をするなどの交流をした。

5) 視察ほか

10月18日（土） 生田神社でニューオリンズの復興を祈願

10月20日（月）

1) 神戸港を「おおわだ2」で視察

船上では、震災で発生したガレキの処理などについて熱心な質問があった。

2) 神戸市危機管理監、観光監と懇談

リサさんが持参したネーギン市長から矢田市長への親書が手渡された。

3) 松本区画整理見学

全焼したまちが、せせらぎのある美しいまちに復興した姿を見学した。

4) 新長田再開発見学

市街地再開発事業が進んでいるJR長田駅南地区をビル屋上から視察した。

5) 神戸ジャズ博物館構想予定地（カルメニ（神戸情報文化ビル）地下）訪問

博物館予定地視察のあと、神戸新聞社の関係者との懇親会が持たれた。

10月21日（火）

1) 人と防災未来センター訪問

震災と復興を紹介した映画の後、サリー先生が涙を流しているのが印象的であった。

2) 甲陽音楽学院訪問

NOCCAのメンバーが甲陽音楽学院を訪問した。

5. 交流事業を振り返って

このように、延べ4日間の交流事業が行われた。これに参加した多くの人々が、ニューオリンズのメンバーと大きな共感を持つことができたのではないだろうか。もちろん話をすること、経験を交流することは重要である。しかし、六甲道でのパネルディスカッションでグエン神父やサリーさんらが話しているように、「人は動物とちがう。動物は餌を食べるが、人は食事をする。食事は、親しい人と一緒に、今まで培ってきたおいしい料理を食べることで、心がやすらぎ楽しさが得られる。音楽も一人ではできない、一緒に演奏し、一緒に聞いてくれる人があって初めて楽しめる。」この言葉が、復興における文化の持つ意味を端的に物語っている。また、神戸で自らも被災したサキソフォン奏者の浅井さんは私にこう語った。「言葉がちがうので話は十分にはできなかったけど、音楽で心が通った。」交流とは言葉だけで行うのではない。ジャズという音楽を通して交流して、五感を通じて心の奥底で通じるものを確信しあうことができたのである。

委員長の池田寔彦さんから、実行委員会の最初に、こういう話をきいた。「自分は、我が家が全焼し、何もかも無くした。しかし、たまたま別の場所に預かってもらっていた自分の楽器（チューバ）だけが助かった。しばらくはなかなか吹く気も出なかったが、あるとき、チューバを持って仲間と演奏をした。そして、それが復興に立ち向かう元気をくれた。」音楽という文化と仲間の力、これが人の復興のエネルギーの大きな源泉となっている。そして、それは単に個人の復興の力というだけにとどまらず、まち全体の復興の力へとつながっていったのである。

今回の交流事業を通じて感じたもう一つ重要なことがある。それは、神戸が持つ「ジャズ」という文化資産の厚み、ジャズを愛する人たちの交流の厚みである。この事業をしていて、本当に多くの方々の協力が得られた。そしてその輪はさらに広がっている。これは、もちろん実行委員会のメンバーの努力に負うところが多いが、それだけではなく、神戸というまちがジャズを愛し育ててきた何よりの証拠であると思う。伝統的な文化の持つ力とはこういうことか、と改めて認識した。

最後に、今回の交流事業を支援していただいたCGPに心から感謝したい。なお、このニューオリンズとのジャズ交流事業は兵庫県の「まちのにぎわいづくり一括助成事業」として採択され、今後2年間継続することとなった。今後とも多くの方々のご支援・ご協力をお願いしたい。

<資料>

1. パネルディスカッション「神戸とニューオリンズの復興経験の交流」

10月21日（火）六甲道北公園「風の家」

出演者

総合司会 小林郁雄 神戸山手大学教授

パネリスト 池田寔彦（実行委員会委員長・琵琶町復興住民協議会会長） 佐藤厚子（六甲北地区まちづくり協議会公園管理会長） ヴィエン・ザ・グエン神父 林春男京都大学教授 サリー・ペリーNOCCA校長 サリバン・フォートナー・Jr.（NOCCA卒業生） 立木茂雄同志社大学教授 マーティン・マサコウスキ（NOCCA卒業生）（リサさんは急遽所用のため帰国）

議事録（抜粋）

<小林>

ともに被災地であり、港町、ジャズという共通点を持つ神戸とニューオリンズ。今まで、そしてこれからの復興にはハードだけではなく、ソフト面も重要である。そんな復興活動において文化活動はどんな役割を果たしていくのだろうかをテーマに語り合いたい。

<佐藤>

平成7年に震災があり、平成18年の春に区画整理事業は終了した。現在公園になっている1ヘクタールの土地は、焼け野原になってしまったところであり、残った家は数えるほどだった。

その後まちの再建に関して、住民から2つの提案がなされた。1つはまちの骨格の提案で、もう1つは8つのまちづくり協議会の結成についてであった。協議会の中に専門部会がつくられ、すべて住民主体のまちづくりが行われることになった。提案はあくまで要望ではなく、自分たちも努力をするという前提で行政と市民の間で対話のキャッチボールが続けられた。苦労も多くあったが、自分たちの思いに近いまちができあがった。この平成13年までの記録は冊子「未来へ」にまとめられている。

最後に作る公園については、「住民で考えるように」と行政側から白紙で渡された。住民が公園の基本設計をすることはめずらしく、勉強や見学、ワークショップが120回も行われた。こうしてつくられた設計を市はそのまま了解し、住民が作った公園が生まれた。それは自然に人が集まる場所となっている。

公園ができれば次は管理と活用、マネジメントについて話合われた。区画整理の終りはハード面の完成であり、ソフト面はそこからの出発である。まちを作り直した後、住民はどうするのか。今は壮大な実験の最中である。大きな公園を住民だけで世話をするのは大変なこともあるが、まちをつくったみんなの力で今も行われている。

「まちづくり協議会」は地震後にできた仕組みである。震災前と同じように作り直したのでは、次の災害には備えられない。そのため住民の力と行政の力でまちを作っていくものである。行政は合意形成のために専門家を派遣し、住民、専門家の意見に対し、行政上の条件を考慮する。このように、自分たちでまちをつくっていく。

重要なのは区画整理がおわっても「まちを育て続ける」ことである。この公園もその姿がよく見える。住民のものである公園は、住民の責任で管理されている。安全を意識しなくても、ここは子どもが遊んでいるところに誰かの目があるように自然と安全な環境がつけられている。

<グエン>

昨日訪れたところ（松本地区）と、自分たちの地域は似ていると思う。

違う点は、災害の後、自分たちはなんとか家の中を住める状況にして、住まなければいけなかったという点である。そのため町並みは水害前と変わっていない。

自分たちの地域のまちづくり協議会はもっと宗教的なつながりでできているが、神戸の協議会の方が進

んでいると感じられた。3年たって避難者が戻り、生活がまた始まっていくと「元に戻ったのに、なぜこれから復興に向けてがんばらないといけないのか」という人もいる。次のために災害に強いまちをつくっていきたいが、その必要性を考えない人も多い。3年前の体験を忘れてしまったのだろうか。

<林>

このような体験の風化は神戸でも言われている。体験には質と数があり、経験者はあるレベル以上の体験をするか、とてもたくさんのかを体験すると忘れない。神戸の住民の4分の1がああ震災で入れ替わった。13年前に起こった出来事を覚えている人はもう小学生にはいない。人が変わるなかで、どうやって体験をつなげていくかは重要なことである。

また地震の周期は長い、ハリケーンは毎年のように訪れるものである。前のまちと同じ脆弱性は必要ではない。まちづくりについては、そのプロセスを成し遂げたことが大きな財産にもなる。この体験をもち続けることが必要である。

<ゲン>

私の地域は6000人のベトナム系の人暮らしている。そのなかで1000人がお年寄り、2000人が大人、3000人が子供である。元はベトナム戦争の難民であった人々が徐々にコミュニティを広げていったのが始まりである。戸建の住宅が多く並ぶ住宅地だ。私はこのコミュニティをより発展させようと、老人ホームをつくるなどの提案をしたがあまり前向きには検討されていない。やっとのことで復旧し、これからというときにみんなの気持ちがそろわない。

人と防災未来センターを見学し、日本人はああ震災を「記憶にとどめておこう」としていると感じたが自分たちのコミュニティでは、「もう忘れて前向きに進もう」という意識が強い。「覚えておこう、そして前へ進もう」ということを大切にしたいと思っている。

<サリー>

この話を聞いて、様々な感情が湧き上がってきた。自分たちを守ってくれると行政が言っていたはずの堤防は、カトリナからは守ってくれなかった。今度こそ守ってくれるものをつくっていると思いつつながら修復を見守っている。つい最近のハリケーン・グスタフのときは持ちこたえることができたが、次の大きなハリケーンが来たときはわからない。そのためにも備えの大切さを感じている。

3年前、私たちの学校は被害を免れたが、軍の施設として使われることになった。生徒はアメリカのあちこちにバラバラになり、勉強することになった。受け入れてくれた多くの芸術学校には感謝しており、とても素晴らしいことだった。しかし、しばらくすると生徒や親からのメールは「いつ学校に戻れるのか」といったものばかりになった。帰りたいたいという強い気持ちを訴える手紙がたくさん送られてきたのである。その後学校を再開すると、まるで学校が磁石になったかのように生徒が引き戻されてきた。そこへ帰れば、自分たちの音楽ができ、自分たちの食べ物が食べられる。なんとしても自分たちのまちへ帰りたかったということがよくわかった。

<マーティン>

日本へ来て、色々なものを見聞きして日本人がコミュニティをととても大切にしていることを感じた。アメリカではその感覚はうすいと思う。近所の人のことも、よほど近くに住んでいる人以外はよく知らないこともある。ここでは、みんなでまちをつくらうとしていることに、とても驚いた。「音楽を通じて」というように置き換えて考えると、心をひとつにするということが理解できた。両親や自分もミュージシャンなので地元のミュージシャンたちとは家族のような繋がりを感している。そのように思えば、コミュニティの力やつながりがよくわかった。

<立木>

音楽や食の交流が今回の中心となっている。私たちが「自分自身は誰か？」という問いかけをされた

きに、価値観や誇り、それらの根っこである文化はすべての局面において大切なものであり、大きな意味を持っている。

文化は誇りの根っこでもあり、自分だけではなく、まちの人たちなどみんなにも共通するものである。「大切だと思う」ことが、「共有される」ものになる。ニューオリンズでのジャズや地域の料理は人を動かすときの1つの起爆剤になるのではないか。まちの「誇り」に思えるものが核となり、そこへ人が集まってくる。そうした“ここ”という場所があるからこそ人は集うことができるのである。

神戸とニューオリンズは何故交流するのか、何故神戸にとどまる活動ではいけないのか。それは、それぞれに違った根っこをもつ二つの都市同士が、お互いの文化を尊重し、異なるところを超えて繋がれると、そこにもうひとつの文化が生まれるのである。違った価値観を持つ人たちが、災害などのきっかけによって集まり活動する。それはそれぞれが自分を超えて繋がっていく、もうひとつの文化がつくられていている。固有のものを尊重すること、それは神戸だけで言えることではない。自分たちの根っこが縦糸ならば、違う価値観の人たちが持つ根っこは横糸であり、文化はそれを紡ぎ上げていく力を持っているものと言える。ジャズや食はみなさんにとって大切なものである。

<サリー>

もちろんジャズは大切。文化は生きる意味を与えてくれるものであり、動物にはない人間固有のもの、生きる価値を見出すものである。

ニューオリンズにはそこ以外の土地を知らない人が多く住んでいる。しかしカトリーナの後は多くの人がアメリカのあちこちへ避難しなくてはいけなくなった。自分の地域から出たことのない人にとっては、外国へ行くような体験だった。これにより地域にある音楽や食べ物、建築や絵画などへの愛着が、それらを求める気持ちが、強くなったと思われる。地域へ戻って来れない人にとって、その事実は絶望的なものだった。他の地域へ避難していた人たちの中には、避難中はまったく音楽を聴けなかったという人もいる。それはその土地の音楽が、自分の生まれ育ったニューオリンズの音楽とは違うものだったからである。

ある有名なジャズ音楽家の言葉に「ジャズは道から湧き出るもの」というものがある。道から湧き出る感覚が確かにニューオリンズにはある。学生や小中学生も楽器を奏でながら帰路に着き、その音楽は家にいるときにも聞こえてくる。子どもたちが街角に集まってボール遊びを始めるように、寄り集まった子どもたちがどこからともなく演奏を始めるという光景もニューオリンズでは珍しくない。

災害の半年後、大きなお祭りを開催することになった。「まだ半年しか経っていないのに」という非難の声もあったが、「すぐにやることに意味がある」ということになり、お祭りは行われた。観光客が訪れることで経済を元気にすること、地域の音楽や食べ物などで楽しい時間を過ごして自分たち自身を癒すこと、わずかな時間でも苦しい生活を忘れる時が必要だった。

ジャズは一人では演奏できない。練習は一人でできても、演奏となるとチームやアンサンブルでやらなければならない。一人では奏でられない。みんなで奏でるという意味で、ジャズは「真の民主主義」と言われることもある。避難生活のためバラバラになった NOCCA の生徒たちも、自分の楽器の練習は避難先できても、一緒に奏でるということができなかった。そうしたことも手伝って、みんな早くニューオリンズへ帰りたいと願っていた。

<マーティン>

この話を聞いていて思ったのは、ニューオリンズには「セカンドライン」という独特の習慣があるということである。復興の過程でこの考え方は重要だと思う。

<サリババン>

セカンドラインとは、死者を弔う葬式の場での、帰りの音楽のことである。まず最初に教会でお葬式を行い墓地まで行く間のパレードでは、先頭にトランペットやチューバなどの楽器隊が立ち、そのあとを家

族や友人が続いていく。ずっと音楽を奏でながら、墓地までの道を歩く。そして棺が埋められると、トランペットがパーンと音を鳴らす。これをきっかけにこれまでの悲しそうな音楽が一気に楽しそうなものになるのである。これがセカンドラインと呼ばれるものである。これには、今は悲しいが死後には天国で生きられる喜びなどの意味が含まれている。埋葬した後は、家までは陽気な音楽を奏でながら皆で歩くのである。

<グエン>

食事人間にとって大切。動物は「餌を食べる」が、人間は「食事をする」。「餌」と「食事」はまったく異なることである。食事をするという行為は、ハリケーンを経験してみて、単に体の欲求を満たすだけのためのものではなく社会的な行為であることがわかった。

「ジャズは一人では演奏できない」とサリー先生が言っていたように、料理もそうであると思う。食事の準備をすること、それを分かち合うことも一人ではできないことである。アメリカの食事は良くないと言われるが、ニューオリンズの食事は本当においしい。“comfort food（心安らぐ食事）”が必要なのである。例えばチキンは家族が日曜日に集まって食べるものとされており、家族との時間と安らぎを与えてくれる。避難中は自分たちの食べなれたものも食べることができなかった。“食べるもの”も“一緒に食べる人”も同時に失っていたのである。食事は自分が帰ってきたことを感じさせてくれるものでもある。体のためだけにあるのではなく、食事は心、家族コミュニティのものといえる。

<林>

神戸の復興がそれまでの復興と何が違っていたか。今までのものは、まちの基盤とまちなみが再建されればよしとされていたことである。阪神・淡路大震災ではそれにプラスして、経済と生活の再建も目的に掲げられている。経済の再建については、日本経済の不況の影響もあり神戸は大変な思いをしてきた。生活再建は5年目に神戸市が「復興検証」を行った。被災者に「何が生活再建か？」と問うと、自分の住まいが直ることとあわせて、人と人とのつながりが保てること、といった答えが返ってきている。

今日の話聞いて、「ジャズは一人では奏でられない」、「人は食事をするのであって、餌を食べるのではない」という二つの言葉がやはり大切だと思う。食事一人でするものではなく、他の人と一緒にいることが大切である。ジャズや食は復興にとってももちろん必要で、そこへ人が集い尊敬しあうこと、お互いに大切だと思うことが重要だと再確認できた。

ヨーロッパへ行っていつも思うことは、街がきれいなことや食べ物、会う人がシビライズされていることである。そこに価値があるから、人が集まっているように思う。神戸もそうあれば、サステイナブルな復興の基礎になる。京都が文化で生き残っているように、新しいものの開発だけではなく、変わらないものを身につけていくべきではないか。自分たちが今持っているもの、つくってきたものをもっと高めるものとして文化を考えるのである。それは考えるだけでなく、「五感」の刺激が必要で、特に音楽や食べ物は文化の広がりを実感させてくれる。

<池田>

昨日はハーバーランドを訪れたが、今そこへジャズ・ミュージアムをつくろうという計画がある。このミュージアムについてはニューオリンズが全面的に協力してくれると、ニューオリンズ国際局のリサさんは約束してくれた。また、今回神戸が日本のジャズの発祥地であると、ニューオリンズに認められたことは本当にうれしい。

神戸には「神戸ジャズ・ストリート」というイベントがある。震災直後のときはできないかと思われていたが、外国からの義捐金に対するお返しは？と考えたときに、元気で笑顔でジャズをやろうという結論になり、すぐにやった。「神戸の復興はジャズの響きから」というスローガンが掲げられた。その年は過去最高の人数、黒字収支決済のイベントになった。今後も、ジャズで人々を元気づけていきたい。

2. 実行委員会

実行委員長 池田寔彦

事務局長 日下雄介

副委員長 中島克元 浅山三郎 高 四代

委員 小林郁雄 河合節二 神田 裕 日比野純一 金千秋 村井 顕彦 森下 悦伸 古田篤司
林春男 牧紀男 立木茂雄 金芳外城雄 船木伸江 油井清光 伊藤真之 近藤民代 市原俊彦
野々村明 榊原 均 杉本信浩

事務局 林 芳宏 天川佳美 太田敏一 友久加奈子 山本真巨 岸本くるみ

参加団体 神戸まちづくり協議会連合会(六甲道駅北地区まちづくり連合協議会、琵琶町復興住民協議会、
新開地周辺地区まちづくり協議会、野田北部まちづくり協議会)、日本学校ジャズ教育協会関西本部、
関西ジャズ協会、神戸ジャズ CITY 委員会、たかとりコミュニティーセンター、カトリックたかとり教
会、FMわいわい、神戸まちづくり研究所、きんもくせい、神戸新聞社、ラジオ関西、神戸ハーバーラ
ンド、京都大学防災研究所巨大災害研究センター、同志社大学社会学部、神戸山手大学現代社会学部都
市交流学科、神戸学院大学防災・社会貢献ユニット、神戸大学(人文学研究科倫理創成プロジェクト室・
人間発達環境学研究科)、甲陽音楽学院、神戸市民文化振興財団、神戸国際観光コンベンション協会